

勿凝学問 178

度を超えた官僚叩きという小泉路線の一番の後継者は小沢民主党だろう

小泉氏引退表明の日

2008年9月26日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

この勿凝学問には、引退シリーズというのがある。といってもたったひとつだけですけどね。

勿凝学問 82 [マニフェスト選挙と民主主義の運営コスト——6月27日のブレア首相辞任に思うことなど](#)

小泉氏が引退表明されたそうなので、ふたつ目をメモしておきます。

今日、2008年9月25日の夕方、「高齢者医療見直しに関する検討会」初会合を終えての帰路——駅で夕刊フジの見出しが、民主党代表の小沢氏が言う「腐った役所に責任取らせる」~~震々~~への品性に欠ける度を超えた批判になっているのを横目に、先日の総裁選で小

1 夕刊フジの見出しを探そうと思ってネットで検索してもみつからず、近くのコンビニ3軒を回っても、日刊ゲンダイしかなく、夕刊フジはどこにもなし。どなたか、昨日の夕刊フジの見出しをご存知でしたら、教えてください。小沢氏が夕刊フジの単独インタビューに応えたとか、なんだかそんな感じの記事だったような気がします。

お礼

いやはや知っている人だけでなく、多くの知らない方からの情報提供、ありがとうございました。身の引き締まる思いです・・・何が？

見出しは、次の文章をもとに記者が作成されたものですね。

「自民党と役所、業界は何十年にもわたり政官業癒着を続け、自分たちの既得権益を守ってきた。それが腐敗し、機能不全を起こしている。民主党が政権をとれば、役所にも明確に責任を取らせる。十手（検察や警察）の力を借りなければならないケースもある」

それと次の文章はおもしろいですね。税金の使い道を抜本的に改めれば1割捻出できるらしい。相変わらずどのようにして1割を捻出するのかを答えてくれないから、僕は問いたい。どうして2割や3割ではなく1割なのか。何を根拠に1割だったらできて2割3割

泉氏が支持した小池氏の「霞ヶ関をぶっ壊す」と同じだなおもいながら帰宅する。するとニュースで小泉氏の引退表明。

僕にとっての小泉氏の名文句は、次。

『朝日新聞』 2006年6月28日4面	歳出削減「増税してでも施策を、と言われるまで」 経財会議で 小泉首相発言
<p>小泉首相が22日の経済財政諮問会議で「<u>歳出をどんどん切り詰めていけば『やめてほしい』という声が出てくる。増税してもいいから必要な施策をやってくれ、という状況になるまで、歳出を徹底的にカットしないとイケない</u>」と発言していたことがわかった。27日に公表された会議の議事録で明らかになった。</p> <p>首相は「<u>ヨーロッパを見ると野党が（増税を）提案するようになっている</u>」と、欧州の消費税をめぐる論議を引き合いに出した。</p>	

講演などで、上の小泉氏の言葉を紹介した後、「日本の財政状況を考えて、この国で許される選択肢は負担増か歳出削減しかないとします。この時、この国で負担増を国民に求めれば政権は吹っ飛ぶと判断した勘の良い政治家には、歳出削減しか途は残されていないことになります。さてこの状況下で、彼ら政治家にとって好都合な情報戦略、キャンペーンは？・・・霞ヶ関を叩きに叩いて大衆に官僚を憎ませ、正義はわれら政治家に有り国民に信じ込ませることでしょうね。エリート叩きをメディアをはじめとした国民は大いに喜びますし、政治家は負担増を求めるリスクから大いに解放されますから」と話したりもする。

そして、「官僚叩きという小さな政府派、負担増先延ばし派の常套手段」を小泉氏から継

はできそうにないのかと。まさか、自分たちの言う施策の必要額を積み上げた22兆円が、たまたま212兆円の1割だったから1割と言っているわけではないでしょう。もし必要額が44兆円になったら2割は捻出できると変わったりして（笑）。

――自民党は「財源がない」と批判している

「一般会計と特別会計を合わせて国の純支出は212兆円ある。この税金の使い道を抜本的に改める。『国民の生活に何が大切か』という基準で、すべての予算を組み替えれば約1割の22兆円は捻出できる。自民党はこれまで莫大な無駄遣いを放置してきた。彼らの批判など意味がない」

いだ安倍氏の政治をみていて書いた文章が、次。

勿凝学問 73 [華麗なる一族によるこの国の改革——インセンティブスキームとしての社会構造の破壊](#)

上の勿凝学問 73 に登場する安倍内閣の幹事長中川氏（そして小池氏の応援団長）の言葉が、「閣僚や官僚は首相への絶対的な忠誠と自己犠牲の精神が求められている」であった。

度を超えた霞ヶ関叩きという小泉安倍内閣の政権浮揚策は、僕からみれば、次の文章に書いているように、この国のインセンティブスキームとしての社会構造を根底から破壊してしまい、このままだったらこの国は壊れるなど感じるほどに危ないものだった。その危なさの正統な後継者が、先日の総裁選時の小池氏グループ 44 名の国会議員であり、そのグループと連立政権でも作れるのではないか（いや、そのつもりなのかな？）と思えるくらいにまったく同じことを大衆にアピールすることにより、大衆の支持を得ようとしている小沢民主党であるように見える。小沢民主党のように、これだけ立派な後継者が育ったのだから、小泉氏も、安心して引退できるのだろう。

今の自民党は、総裁が自公からなる全閣僚に「官僚を使いこなす」というような、いかにも大衆受けしなさそうな柔^{やわ}なことを指示するほどに、（僕的には）あまりにも正しいことを言うようになってしまったので、小泉安倍路線が採ってきた霞ヶ関をぶっ壊す路線での浅はかな政権浮揚策をとる DNA は、民主党にしか遺^や伝されていない状態になっている。この国の国民相手に財源の話などしては政権などとれるわけがないじゃないかとうそぶく小沢民主党にとって、官僚叩きが生命線になるのは、論理必然的な帰結である。見わたせば、負担の話などをしたら国民的人気など維持できるはずがないではないかとうそぶいて、政官のあり様を勧善懲悪仕込みの三文劇場に仕立て上げた小泉路線の正統な後継者は、小沢民主党の他にないように見える。小沢民主党は、財源問題を突かれれば突かれるほど、官僚叩きをエスカレートさせ、今日の夕刊フジでは、「腐った役所に責任取らせる！」との見出しの域に達している。

「勿凝学問 73 [華麗なる一族によるこの国の改革——インセンティブスキームとしての社会構造の破壊](#)」より

「華麗なる一族」最終回(2007年3月18日)の視聴率は、関東地区 30.4%、関西地区 39.8%であったらしい。ということで、閨閥^{けいぼつ}の説明は略す。「華麗なる一族」で、閨閥という言葉が繰り返し出てくるのを観ているうちに、雑誌『選択』2月号に、「日本を支配する世襲閨閥議員——安部晋三はその典型」という記事があったのを思い出した。

『選択』曰く、

「世襲議員と閥閥議員がそのいずれか一つで支配構造の住人となる例はむしろ稀で、いずれにも該当する世襲閥閥議員が特権的支配構造のメインストリームを形成してきた。この世襲閥閥議員こそが、戦後の日本を支配してきた、または支配し続けている見えざる力の正体なのである」。

ほほうっ、なんとも、その通りであるような気がしないでもない。

さて、世襲閥閥議員の典型であるらしい安倍首相が、閣僚・党三役の多くに世襲議員・閥閥議員を配した政権が推し進めている政策のうち、きわめて順調に効果が出ている2大政策は、官僚破壊と医療破壊であるように見える。すなわち、官僚(文系受験の勝者)および医師(理系受験の勝者)の権力の剥奪と地位の引き落としである。

おもしろいのは、現政権は、一方では、しっかりと勉強した子どもたちの行き着く先の官僚・医師の自尊心を傷つけながら、他方では、教育改革などもやりたいらしいのである。

さてさて、このふたつってのは両立するのだろうか？

...

この国で最も改革が必要な世界は、「政界」ではないのかと思い始めて久しい。

...

組織は人であると言えば、人はそうだと答えるだろうし、会社は人であると言っても、人はそうだと答えるだろう。しかしながら、国家は人だと言うと、想像力がついてこられる人とそうでない人がいるようなのである。

国家も人である——2日前の3月22日に亡くなられた気概ある作家、城山三郎氏が「個人ががんばっても指導者が間違えば国は滅ぶ」とおっしゃっていたのを引用するまでもなく、国家は人である。支配階級が世襲・閥閥に支配され、立身出世という言葉が死語となって教育がエリートの再生産システムとして機能しておらず、教育の階段を駆け上ってみても世襲・閥閥議員という支配階級にいいようにあしらわれる社会——どのように考えぬけば、「活力ある国」、「教育が再生された国」を創造できるのやら。

遠い将来、他国の歴史家たちは、「かつて日本という国があった。しかし滅びた。最大の原因は、他の先進国に比してエリート再生産システムが不健全だったからである」の一言で片付けられるおそれがあると思っていたりもする。とくに最近の、目の前

の参議院選挙を乗り切るために、日本の行政システムの良いところも悪いところもひっくるめて破壊しようとする、ひいては目の前の選挙対策として日本のインセンティブスキームとしての社会構造そのものを破壊しようとする世襲・閥閥議員たちの論をみたり、「人材バンクを作ったら(各省の)次官をオークションにでもかけたらどうか」〔『読売新聞』3月18日朝刊4面〕などの言を聞いたりしていると、そう思う。

メディアは、各省庁から官僚の退職後の人事権を奪うことにより官僚の自律性を喪わせて帰属意識を所属省庁から政治家に向かわせようとする動きを、きわめてよしとする論調で報道しているようであるが、この国の政治家はそれほどに信頼できるものなのか。政治家性善説に寄りすぎていないか。世論は、政治家は正しく政治家の正しい企てを邪魔しているのが官僚という構図で話をしているようなのであるが、この仮説は現実のこの国の政策形成過程を正確に描写しているのか。いまの官僚には問題はあろう、しかしながら、いまの政治家にもそれに負けず劣らずの問題があり、官僚という拮抗力が消えるとすればいまの日本の政治は危険でさえある——わたくしにはそう見えてしまう。

再び『選択』曰く、

「日本と同じ島国で同じ立憲君主制の民主主義国家を形成している英国には、日本のような世襲議員や閥閥議員は皆無といわれている。文字通りの二世議員・三世議員は存在するが、それは本人の実力と努力の正当な結果であり、ブレア首相も日本で言う陣笠代議士から英国の政治リーダーとなった。世襲に閥閥を重ねるのではなく、実力に努力を重ねるのでなければ、政治の本当のダイナミズムは生まれてこない」。

再度言うておく——2世、3世や立派な岳父を持つことが必ずしも問題ありというわけではなく、日本の政界全般を含めて、この国で最も改革が必要な世界は、「政界」の改革ではないのかと思っているのである。

なお、わたくしが支配階級・エリートという言葉を使うとき、モスカ、パレート、シュンペータ流の支配階級と被支配階級が存在する寡頭制的な民主主義論、エリート論を基礎にしていることに注意されたい。普通に考えれば、支配階級・エリートなどのキーワードを欠く民主主義国家論など無意味であることはお分かりになられると期待したい。